

家族の問題対処行動と家族構造との関連について

森川 夏乃 (愛知教育大学心理講座)

狐塚 貴博 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

The Relationship between Family Coping Behaviors and Family Structure

Natsuno MORIKAWA (Department of Psychology, Aichi University of Education)

Takahiro KOZUKA (Graduate School of Education and Human Development
Nagoya University)

要約 本研究では、家族の問題対処行動のパターンを測定する尺度を作成し、家族構造との関連について検討を行うことを目的とした。高校生・大学生653人を対象として、家族の対処行動パターンを尋ねる尺度と家族構造測定尺度を実施し、分析を行った。その結果、家族の対処行動パターンについて尋ねる尺度は、「協調・具体的解決」、「対立・強制」、「子ども主導」、「落胆・回避」、「受容・見守り」の5つの下位尺度から成る尺度が作成された。そして、家族構造を説明変数、家族の対処行動パターン尺度の下位尺度を目的変数として重回帰分析を行ったところ、母子結びつき、父母結びつき、母親から子どもへの勢力が主に影響していることが示された。

Keywords: 家族, 対処行動, 青年期

I 問題と目的

家族は、個人が属する最も身近で、特有の機能を有する小集団であるといえよう(Parsons & Bales, 1956)。この小集団内において、家族の成員は独立して存在するのではなく、常に複雑な相互影響過程に置かれている。このように、家族は、成員同士の相互作用からなるひとまとまりの意味を持った集団、つまり一つのシステムとして捉えることができる。

1. 青年期の子どもを持つ家族

家族システムは、変換性、全体性、自己制御性という性質を備えた生物体システムであり、誕生し発達して死に至るプロセスを持つ(長谷川, 1987; 中釜, 2008)。Carter & McGoldrick(1989)は、6段階からなる家族ライフサイクルのモデルを提案し、各家族発達段階に求められる家族システムの課題を示している。例えば、幼児を育てる時期の家族システムは、夫婦二人だけの関係性から、幼児を含めた父親と母親としての関係性へと調整し、家族の構造やルール、役割を変化させていくことが求められる。このように家族システムは、子どもの誕生や進学・自立、親の病気や介護、死別といった様々なライフイベントや、突如降りかかってくる事象に対して、元の安定状態を維持しようとする形態維持と、構造やルール、役割自体を変化させる形態発生とのバランスを取りながら質的に変化していくことが求められる(中釜, 2008)。

中でも、青年期の子どもがいる時期の家族は、家族ライフサイクルの中でも最も困難で問題が表面化しやすい時期にあたることが指摘されている(渡辺, 1996)。この時期において、青年は友人関係や恋愛関係、進路選択、自立、家族としては子どもの独立を促すよう親子関係の再編、さらに親は中年期を迎え身体の衰えや職業上の責任の増加といったように、家族は様々な課題に直面し、これらに対処していくことが求められる。実際に、幼児期から青年期の家族関係や家族内外のストレスについて青年を対象として調査を行った若島ら(2010)、Usami *et al*(2011)によると、思春期から青年期にかけて親と子の勢力が転換することや、また青年が認知する家族内のストレスが増加していくことが示されている。

2. 家族の問題対処パターン

こうした青年期における家族の様々な問題に直面した際に、家族はどのような対処が求められるのだろうか。家族の問題に対する対処として、Minuchin *et al*(1978)は、自身の家族面接の経験から、心身症の子どもを持つ家族では、問題から回避的な傾向があることを指摘している。また、Friedmann *et al*(1997)は、精神疾患の者がいる家族では、問題解決の水準が低いことを指摘している。さらに、家族機能の低い家族においては心身症の発症リスクが高いことも指摘されており(増田ら, 2004)、子どもが病理や症状を呈している

家族においては、解決が十分に図られないような特徴的な家族の対処行動パターンがあることが推察される。それゆえ、家族が抱える問題の解消や、適切な家族発達を促していくためには、家族がとる問題対処のパターンを把握し、そのパターンを変容させることが求められる。

しかしながら、問題に対して家族がとる対処行動に焦点を当てた研究はあまり見られない。だが、対処行動をアセスメントすることができれば、病理や症状との関連について検証したり、家族へ介入する一つの指針にもなることが考える。また、対処行動の変容を求める場合、家族内のどの関係性に焦点を当てて介入を行うことがより効果的であるかが明らかであれば、限られた時間で家族支援を行う際や、行動変容につながらず硬直している面接にとって、有用であると考えられる。

よって本研究では、家族の対処行動パターンを測定する尺度を示し、家族の構造との関連について検討を行う。特に、先述したように、家族にとって最も困難で問題が表面化しやすい青年期を対象として検討を行う。また、家族関係の認知は、親子間においても異なるため(Rowa *et al*, 2001)、誰の視点から捉えるかが重要である。そこで本研究においては、子どもの問題に対して家族がどう対処行動をとるかについて示すために、青年の視点から、青年本人が認知する家族構造や家族の対処行動に着目する。加えて、母子間の結びつきの強さや父親・母親からの子どもへの影響力といった家族構造の認知は、男女間で差があることから(狐塚, 2011)、性差を踏まえた検討も行うこととする。

II 方法

1. 実施手続きと調査対象者

東北地方の2つの高等学校と、関東・関西・東北地方の4つの大学の、高校生・大学生755名に対して質問紙調査を実施した。

高校生に対しては、授業またはホームルームの一部の時間を利用して実施した。また、大学生に対しては、講義の一部の時間を利用して実施した。いずれの実施においても、一斉配布し、研究に同意した者のみ回答をしてもらい、一斉に回収を行った。

このうち、質問項目の回答不備のある者、父子家庭・母子家庭の者、一般大学生の年齢以上の者(23歳以上)を除外し、15歳から22歳の青年653名(高校生333名、大学生320名)を分析の対象とした。男性335名、女性318名で、平均年齢は18.20歳($SD=1.83$)であった。

2. 質問項目

1) 基礎情報

対象者の年齢、兄弟の数、出生順位、生活形態などの基礎情報の記入を求めた。

2) 家族内の問題対処パターンの測定

子どもに何か問題が起こった時の家族内(父・母・子ども)で行われる問題対処のパターンを測定するため、Costigan *et al*(1997)の家族で行われる問題解決の行動の分類を用いて、尺度項目の作成を行った。Costigan *et al*(1997)は、知的障害児と健常児を持つ家族の話し合い時のインタラク션을調査し、親の解決行動として、「不賛成(“Disapproval”)」、「命令(“Directive”)」、「支持的問題解決(“Supportive Problem Solving”)」、「積極的傾聴(“Active listening”)」の4因子を示している。本研究においても、この分類に基づき、家族療法場面で見られる家族の問題対処行動を踏まえて38項目を作成した。

まず、「あなたに何か問題が起こった時、あなたの家族ではその問題にどのように取り組みますか」という教示文に続き、問題の例として病気やケガ、学業、進路、対人関係、金銭的な問題といった例を示し項目内容を示した。項目内容としては、「家族の誰かの意見に私を従わせようとする」、「家族がそれぞれ違う役割で私に関わる」、「当該の問題以外に話がそれてしまう」など、家族が子ども自身の問題にどのように関わるかに焦点を当て、「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」までの6件法により回答を求めた。

3) 家族構造の測定

子どもの認知する家族構造の測定には、家族の各関係を効率よく包括的に把握できる家族構造測定尺度(狐塚ら, 2007; 野口ら, 2009)を用いた。家族構造測定尺度は、高次のシステム研究を行う目的で開発され、被験者に負担が少なく最小の因子構造により各関係(両親、父子、母子関係)から構成される家族構造を単一項目で捉えることが可能である。本研究では家族構造測定尺度で提案されている「結びつき」「利害的關係」「勢力」「開放性」という家族関係を把握する最小の4因子構造のうち、「結びつき」と「勢力」の2因子に限定して用いた。

下位項目である「結びつき」については、お互いの仲の良さや親密さ、連帯感の強さを表すことを示し、父母間、父子間、母子間において「全くそう思わない」～「非常にそう思う」までの6件法により回答を求めた。「勢力」については、誰の誰に対する勢力かを明確にするため、父母間、父子間、母子間の双方向(計6方向)から査定を行った。それぞれの影響力や発言力、決定力の強さであることを示し、「全くそう思わない」～「非常にそう思う」までの6件法により回答を求めた。

3. 倫理的配慮

質問紙配布前に口頭で、調査は無記名で行われ、回答は自由であること、結果は統計的に処理され個人が特定されることはないことを説明し実施した。また、

質問紙のフェイスシートにも同様の内容について記し、これらに同意した者について調査が実施された。

III 結果

1. 家族内の問題対処パターン尺度の因子構造の検討

家族内の問題対処パターン尺度の全 38 項目について、いずれも天井効果、フロア効果は見られなかったため、全 38 項目に対して、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、固有値の減衰状況(第 1 因子から第 6 因子まで、11.59, 4.87, 2.34, 1.32, 1.16, 1.06)と、因子の解釈可能性から 5 因子構造が妥当であると判断した。そこで、再度 5 因子を仮定して、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。

さらに、2 つ以上の因子への負荷量が.30 以上の項目や、どの因子への負荷量も.35 以下である項目を除きながら因子分析(最尤法、プロマックス回転)を繰り返したところ、おおむね因子負荷量.35 以上なり、かつ各因子に項目のまとまりがみられたため、因子分析を打ち切った(Table1)。

因子分析の結果抽出された項目に基づき、以下のように命名した。第 1 因子には、解決に向けて家族が協力して具体的な対応を取って行く項目がまとまったことから「協力・具体的解決」と命名した。第 2 因子は、問題によって家族が対立したり、子どもに強制的に行動を強いるといった項目がまとまったことから「対立・強制」と命名した。第 3 因子は、子どもの意思を優先させる項目がまとまったことから「子ども主導」

Table1 家族の対処行動パターン尺度 因子分析結果(プロマックス回転後のパターン)(n=653)

	I	II	III	IV	V
I 協調・具体的解決					
16解決に向けた話し合いをする	.98	-.04	.02	.02	-.20
15何が原因かを話し合う	.87	.01	.04	.07	-.15
5家族全員で話し合い協力する	.79	-.06	.07	.06	-.14
19お互いに気持ちや考えを言う	.62	.18	.04	-.02	.12
33その問題の解決に役立つ情報をくれる	.58	.01	.02	-.06	.16
36何か良い解決策を提案してくれる	.56	.05	.05	-.07	.21
22家族の意見や判断を一致させて取り組む	.55	-.07	-.03	.15	.24
24お互い話し合わない	-.53	.09	.12	.22	-.19
25問題によって取り組み方を変える	.42	.05	.00	.10	.18
II 対立・強制					
17感情的になり決裂してしまう	-.03	.74	.07	-.04	-.08
4各自の意見が対立する	.01	.71	-.06	-.11	.08
13どんな理由であれ私を非難したり不満を言われたりする	.00	.68	.06	-.04	-.14
18当該の問題以外に話がそれてしまう	-.06	.67	.13	.06	.10
12私に指示や命令をする	.10	.66	-.22	-.09	.02
3家族の誰かの意見に私を従わせようとする	.10	.53	-.29	.02	-.04
37家族の誰かのせいにする	-.10	.49	.09	.21	-.09
14私より先に問題を対処しようとする	.13	.34	-.11	.14	-.05
III 子ども主導					
1私のやりたいようにさせてくれる	.04	-.02	.83	-.06	.04
2どうしたら良いかを私に決めさせてくれる	.10	-.03	.78	-.06	.09
IV 落胆・回避					
34各自、自分自身を責める	.15	-.07	-.03	.76	.06
31家族は話し合いが出来ないほど落ち込んでしまう	-.02	-.12	-.06	.73	-.03
35各自が葛藤的になり、その調整を求められる	.12	.24	-.05	.58	.12
29その問題についての話題を避ける	-.26	.10	.07	.45	.07
V 受容・見守り					
28私の意見も尊重して取り組む	.21	.08	.14	-.04	.66
21まず私の話をきいてくれる	.25	-.10	-.03	.05	.59
23私を理解しようとしな	-.11	.30	.04	.09	-.50
11私の提案に応じる	.13	.07	.28	.04	.48
10問題を直接言わずに見守ってくれる	-.03	-.15	.15	.21	.36

因子間相関

I 協調・具体的解決				
II 対立・強制	-.28			
III 子ども主導	.16	-.24		
IV 落胆・回避	-.38	.55	-.60	
		-.08	.45	
			-.34	

と命名した。第4因子は、家族が落胆し、解決に向けた行動に向かないで避けるといった項目がまとまったことから「落胆・回避」と命名した。第5因子は、子どもの意見を聞き、見守るといった項目がまとまったことから「受容・見守り」と命名した。以上、28項目の、5つの下位尺度を構成した。

5つの下位尺度の内的整合性について検討するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、「協力・具体的解決」 $\alpha=.89$ 、「対立・強制」 $\alpha=.85$ 、「子ども主導」 $\alpha=.87$ 、「落胆・回避」 $\alpha=.72$ 、「受容・見守り」 $\alpha=.82$ であった。

2. 家族の問題対処パターンと家族構造との関連

家族の問題対処パターンと、家族構造との関連を検討するために、Pearsonの相関係数を算出した(Table2)。その結果、「協力・具体的解決」は、すべての家族成員間の結びつきと、勢力と正の相関が見られた($r=.08 \sim .47, p<.001 \sim .05$)。「対立・強制」は、家族成員同士の結びつきと負の相関($r=-.30 \sim -.19, p<.001 \sim .01$)があり、子から父・母への勢力と母から父への勢力と負の相関($r=-.17 \sim -.09, p<.001 \sim .05$)があることが示された。また、「子ども主導」は、家族成員間の結びつきと正の相関($r=.11 \sim .27, p<.001 \sim .01$)、子から父・母への勢力と正の相関($r=.16, p<.001; r=.21, p<.001$)、父から子への勢力と負の相関($r=-.11, p<.01$)があることが示された。「落胆・回避」は、家族成員間の結びつきと負の相関($r=-.22 \sim -.16, p<.001$)、母から子への勢力と負の相関($r=-.10, p<.01$)があることが示された。そして、「受容・見守り」は、家族成員間の結びつきと正の相関($r=.31 \sim .47, p<.001$)、子から父・母への勢力及び母から子・父への勢力と正の相関があることが示された($r=.09 \sim .35, p<.001 \sim .05$)。

3. 家族の対処行動パターンに与える家族構造の影響 家族構造測定尺度の「父子結びつき」、「母子結びつ

き」、「父母結びつき」、「子から父勢力」、「子から母勢力」、「父から子勢力」、「父から母勢力」、「母から子勢力」、「母から父勢力」を説明変数、家族の対処行動パターン尺度の5つの下位尺度をそれぞれ目的変数とする、重回帰分析(ステップワイズ法)を行った(Table3)。

その結果、「協力・具体的解決」では、「母子結びつき」「父子結びつき」「父母結びつき」「母から子勢力」が正の影響を及ぼしていた($\beta=.09 \sim .34, p<.001 \sim .05$)。「対立・強制」においては、「母子結びつき」「父母結びつき」「子から父勢力」が負の影響($\beta=-.27 \sim -.08, p<.001 \sim .05$)、「父から子勢力」「母から子勢力」が正の影響(順に $\beta=.11, .17, p<.01, .001$)を及ぼしていることが示された。また、「子ども主導」は、「母子結びつき」「父母結びつき」「子から母勢力」が正の影響($\beta=.12 \sim .24, p<.001 \sim .01$)、「父から子勢力」「母から子勢力」が負の影響(順に $\beta=-.16, -.12, p<.001, .01$)を及ぼしていた。「落胆・回避」においては、「子から母勢力」が正の影響($\beta=.10, p<.05$)、「母子結びつき」「父母結びつき」が負の影響(ともに $\beta=-.18, p<.001$)を及ぼしていた。そして、「受容・見守り」は、「母子結びつき」「父母結びつき」「子から母勢力」が正の影響($\beta=.20 \sim .37, p<.001$)、「父から母勢力」「母から子勢力」が負の影響(順に $\beta=-.13, -.09, p<.001, .05$)を及ぼしていることが示された。

4. 男女別の家族の対処行動パターンと家族構造との関連

各変数間の性差を対応のないt検定により検討した。その結果、「母子結びつき」($t(642)=-5.68, p<.001$)、「子から父勢力」($t(651)=-2.69, p<.01$)、「母から子勢力」($t(651)=-2.23, p<.05$)は、男性よりも女性の方が有意に高い得点を示した。また、「父から子勢力」($t(648)=2.47, p<.05$)においては、女性よりも男性の方が有意に高い得点を示した。

Table2 各変数間の相関係数($n=653$)

	父子 結びつき	母子 結びつき	父母 結びつき	子から父 勢力	子から母 勢力	父から子 勢力	父から母 勢力	母から子 勢力	母から父 勢力
協力・ 具体的解決	.35***	.47***	.39***	.22***	.21***	.16***	.08*	.29***	.17***
対立・強制	-.19***	-.30**	-.30***	-.17***	-.14***	.03	-.01	.05	-.09*
子ども主導	.11**	.27***	.14***	.16***	.21***	-.11**	.00	-.07	.04
落胆・回避	-.16***	-.20***	-.22***	-.02	.00	-.07	-.05	-.10**	-.08
受容・ 見守り	.31***	.47***	.31***	.28***	.35***	.04	.03	.09*	.14***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

家族構造において性差が見られたことから、男女別に重回帰分析を行った(Table4)。その結果、男女ともに、「母子結びつき」は家族の問題対処パターンのすべての下位尺度に影響を与えていることが示された(男性 $\beta = -.31 \sim .42$, $p < .001 \sim .01$, 女性 $\beta = -.26 \sim .31$, $p < .001 \sim .05$)。また、「父母結びつき」も女性において

はすべての下位尺度に影響を与えており ($\beta = -.32 \sim .29$, $p < .001 \sim .01$)、男性においては「子ども主導」以外の下位尺度に影響を与えていた ($\beta = -.25 \sim .17$, $p < .001 \sim .01$)。また、「対立・回避」、「子ども主導」、「受容・見守り」において、性差が見られた。

Table3 家族の問題解決パターンに関する家族関係の重回帰分析(ステップワイズ法) ($n=653$)

説明変数	目的変数				
	協調・具体的解決	対立・強制	子ども主導	落胆・回避	受容・見守り
父子結びつき	.09*	.01	.01	-.04	.06
母子結びつき	.34***	-.25***	.24***	-.18***	.37***
父母結びつき	.21***	-.27***	.12**	-.18***	.22***
子から父勢力	.01	-.08*	.04	.03	.06
子から母勢力	.01	.04	.14**	.10*	.20***
父から子勢力	-.05	.11**	-.16***	-.00	-.04
父から母勢力	-.06	.06	-.01	.01	-.13***
母から子勢力	.12**	.17***	-.12**	-.02	-.09*
母から父勢力	-.01	-.05	.03	-.01	.04
自由度調整済みR ²	.30	.18	.13	.07	.30

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注)数値は標準偏回帰係数

Table4 男女別の家族の問題解決パターンに関する家族関係の重回帰分析(ステップワイズ法) ($n=653$)

説明変数		目的変数				
		協調・具体的解決	対立・強制	子ども主導	落胆・回避	受容・見守り
父子結びつき	男性	.12*	-.01	-.00	.02	.05
	女性	.07	.02	-.06	-.05	.03
母子結びつき	男性	.34***	-.31***	.24***	-.19**	.42***
	女性	.31***	-.26***	.22***	-.13*	.31***
父母結びつき	男性	.15**	-.25***	.02	-.18**	.17**
	女性	.29***	-.32***	.19**	-.18**	.17**
子から父勢力	男性	-.02	-.09	.14*	.07	.16**
	女性	.02	-.08	-.06	.03	-.04
子から母勢力	男性	-.04	.02	.04	.13*	.04
	女性	.09	-.07	.18**	.07	.27***
父から子勢力	男性	-.07	.13*	-.11	.08	-.06
	女性	.03	.01	-.22***	-.07	-.03
父から母勢力	男性	-.05	-.02	-.04	-.02	-.08
	女性	-.05	.15**	.05	.05	-.11*
母から子勢力	男性	.12*	.22***	-.20***	.07	-.10*
	女性	.12*	.14**	-.11	-.11	-.16**
母から父勢力	男性	-.08	-.01	-.02	-.00	-.06
	女性	.08	-.10	.00	-.02	.15*
自由度調整済みR ²	男性	.30	.18	.08	.07	.28
	女性	.27	.17	.17	.06	.30

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注)数値は標準偏回帰係数、男性 $n=335$ 女性 $n=318$

IV 考察

1. 家族の対処行動パターン尺度の検討

家族の対処行動パターンを問う 38 項目について探索的因子分析を行った結果、5 因子が抽出された。項目の内容を見ると、第1因子「協力・具体的解決」には、「解決に向けた話し合いをする」といった項目が高い因子負荷量を示しており、解決に向けて家族が協力して、情報提供をするなど具体的で支持的な解決行動をとる項目がまとまった。作成時に参考にした Costigan *et al*(1997)の分類においても、積極的な問題対処やサポートは、「支持的な問題解決」因子にまとまっており、本尺度の「協力・具体的解決」と同様の項目である。このことから、第1因子は、家族の支持的な協力と解決に向けた具体的行動について問う因子であることがわかる。次に、第2因子「対立・強制」には、「各自の意見が対立する」「私に指示や命令をする」といった項目が高い因子負荷量を示しており、Costigan *et al*(1997)における、嫌悪感や落胆・非難、反対の項目が含まれている「不賛成」や、直接的・間接的に命令をする項目が含まれている「命令」と、項目の内容が一部重なった。また、第4因子「落胆・回避」にも、「各自、自分自身を責める」「その問題についての話題を避ける」といった項目がまとまっており、本尺度の第2因子と第4因子が「不賛成」と「命令」を合わせた内容であると考えられる。各因子の項目を見ると、特に、第2因子は、家族の誰かの意見に従わせようとし、家族成員が衝突をするという内容で、第4因子は、家族が問題から目を背け、非難し合うといった内容が中心にまとまったと考えられる。また、第3因子「子ども主導」は、「私のやりたいようにさせてくれる」といった項目で、第5因子「受容・見守り」には「私の意見も尊重して取り組む」といった項目がまとまっている。これらの子どもの意思を尊重した項目は、Costigan *et al*(1997)における、「積極的な傾聴」に含まれているが、本研究の第3因子では特に、子どもの意思決定を中心に問題解決を進めていくという内容で、第5因子では子どもを理解をしようとする内容がまとまっていることが示された。

また、各因子の内的整合性は、「協力・具体的解決」 $\alpha=.89$ 、「対立・強制」 $\alpha=.85$ 、「子ども主導」 $\alpha=.87$ 、「落胆・回避」 $\alpha=.72$ 、「受容・見守り」 $\alpha=.82$ と、十分な値が確認されたことから、因子内の信頼性が高い一貫した項目のまとまりであることが示された。

2. 家族構造が家族の対処行動パターンに与える影響

家族構造が家族の対処行動パターンに与える影響について、重回帰分析を用いて検討したところ、いずれの対処行動パターンの下位尺度においても、母子結びつきと父母結びつきが影響を与えていることが示された。すなわち、家族成員の母親との結びつきの強さが

重要であることが示唆された。これは、我が国の父子関係は希薄である(小野寺, 1993)こと等で、父親よりも母親の方が問題に気づきやすく、かつ対処の際には母親が中心的存在となりやすいという背景があることが考えられる。また、「協力・具体的解決」「子ども主導」「受容・見守り」においては、「母子」「父母」結びつきからの正の影響があり、「対立・強制」「落胆・回避」においては負の影響があった。Kobak *et al*(1993)は、安定した母子関係を持つ青年は、問題に直面しても怒りを表出したり回避することが少ないことを示しているが、子ども以外の家族においても同様のことがいえることが示唆された。つまり、母子の結びつきの強さは、問題に直面した子どもやその母親が、協力して具体的問題対処を促すことを示された。そして、母親と母親以外との家族成員の結びつきが強いことで、母親を中心として協力的な問題解決体制が作られることとなるが、結びつきが弱い場合には、家族成員が各自の意思のままに発言したり振舞うことで、対立したり、時には問題を回避することが考えられる。

さらに、「落胆・回避」以外の対処行動パターンの下位尺度において、「母から子勢力」が影響を与えていることが示された。「子ども主導」「受容・見守り」においては、「母から子勢力」の負の影響があることが示され、母親からの影響力が低いほど、子どもの意思や考えを中心とした問題への取り組みがなされることが示された。一方で、「対立・強制」「協力・具体的解決」においては、「母から子勢力」の正の影響があることが示された。先の結びつきの考察とも合わせて考えると、母親を中心として結びつきの強い家族では、母親からの影響力が強いことで、母親が先頭に立って問題解決に協力して取り組む体制となることが考えられた。しかし、母親を中心とした結びつきが弱い家族の場合には、母親の勢力が高すぎると、対立が激しくなることが考えられる。

加えて、男女別に重回帰分析を行ったところ、「対立・強制」「子ども主導」「受容・見守り」において、男女差が目立った。

まず、「対立・強制」においては、「母子結びつき」「父母結びつき」「母から子勢力」は男女ともに共通して影響が見られたが、男性は「父から子勢力」の正の影響があるのに対し、女性は「父から母勢力」の正の影響を受けていた。このことから、男性は自分自身に対する父親の影響力が高いほど対立的と感じるが、女性においては父親が母親をどう扱うか、とい視点から対立状況を捉えていることがうかがえる。家族成員それぞれが認知する夫婦間葛藤の原因帰属と家族機能の評価との関連について両親と子どもに対して質問紙調査を行い検討した川島(2005)によると、女子は、子ども自身が認知する両親の関係性に対する考察が、家族に対する評価や家族の凝集性に影響を及ぼすのに対し、

男子は、父親自身が認知する夫婦間葛藤の内的原因帰属が直接、子どもの家族評価に影響を与えていることを示している。すなわち、女子においては夫婦関係、男子においては同性である父親の存在が、家族内の対立といった家族の評価につながることを示唆された。

また、「子ども主導」においては、「母子結びつき」に加えて、男性は「子から父勢力」が正の影響、「母から子勢力」が負の影響を与えていることが示された。対して、女性は、「父母結びつき」「子から母勢力」が正の影響があり、「父から子勢力」と負の影響があることが示された。つまり、同性の親への影響力が高く、異性の親からの影響力が弱いほど、子どもが主導的な対処になっていると認知することが示された。

さらに、「受容・見守り」においては、男女ともに「母子結びつき」「父母結びつき」「母から子勢力」の影響に加え、男性においては、「子から父勢力」が正の影響を与えていた。対して女性は、「子から母勢力」と「母から父勢力」が正の影響、「父から母勢力」が負の影響を与えていた。このことから、同性の親への影響力は、子どもが受容的な対処だと認知するにあたり、重要であることが示唆された。「子ども主導」においても、同性の親への影響力があるほど、子ども主導的に対処できていると認識できていた。「子ども主導」も「受容・見守り」もまた、子ども自身の意思を尊重した対処パターンであり、同性の親との勢力関係が関連するという結果から、子どもが問題について同性の親と相談しながら取り組むことが一つにはあるのではないかと推察された。加えて、女性においては、父母間の勢力関係も影響しているが、「対立・回避」とは反対の勢力関係であることが示された。上述したように、女性は夫婦関係について観察し、考察した内容を反映させて家族を評価していると考えられる。その際、母親から父親への勢力が増すほど、つまり母親が主導権をとるほど、子どもの意思を尊重した関わりとなることが示唆された。中学生と大学生の母親関係を比較した久保田(2009)によると、大学生の母親は中学生の母親よりも娘を援助が必要な子どもとしてよりも、対等な相手として見てコミュニケーションをとっていることを示唆している。すなわち、青年期の女性やその母親は、互いに対等に問題解決について話し合える存在だと認識しているため、女性は母親に対して様々なこと信頼し相談している可能性がある。そのような母親が中心となることで、青年期の女性は自分の意思が尊重された問題への対処だと感じるのではないかと考えられる。

V 今後の課題

本研究においては、家族内のストレスが高まる時期として、青年期にあたる高校生から大学生を対象として分析を行った。しなしながら、小学・中学・高校・

大学によって親子の関係性や距離感に変化するものである(落合・佐藤, 1996)。また、子どもが乳幼児期の家族では仕事との両立や、介護をしている家族の介護負担感など、各家族発達段階それぞれのストレスや困難さがある(例えば、佐藤, 2015; 高崎, 2003)。ゆえに、本研究を通して得られた知見は、他の年代の家族にすべて適用するには注意が必要であろう。今後は、他の年代の家族との比較を通して、家族の問題への対処行動パターンを精緻化していく必要があると考える。

引用文献

- Carter, E.A. & McGoldrick, M. (1989) *The changing family life cycle: A framework for family therapy*. 2nd ed. New York: Gardner Press.
- Costigan, C. L., Floyd, F. J., Harter, K. S., & McClintock, J. C. (1997). Family process and adaptation to children with mental retardation: Disruption and resilience in family problem-solving interactions. *Journal of Family Psychology*, *11*(4), 515.
- Friedmann, M. S., McDermut, W. H., Solomon, D. A., Ryan, C. E., Keitner, G. I., & Miller, I. W. (1997). Family functioning and mental illness: A comparison of psychiatric and nonclinical families. *Family Process*, *36*(4), 357-367.
- 長谷川啓三 (1987). 家族内パラドックス—逆説と構成主義—. 彩古書房.
- 川島亜紀子 (2005). 家族成員による夫婦間葛藤の認知と子どもの家族機能評価との関連: 中学生とその家族を対象に. *発達心理学研究*, *16*(3), 225-236.
- Kobak, R. R., Cole, H. E., Ferenz - Gillies, R., Fleming, W. S., & Gamble, W. (1993). Attachment and emotion regulation during mother - teen problem solving: A control theory analysis. *Child development*, *64*(1), 231-245.
- 狐塚貴博・野口修司・閨間理絵・石橋曜子・若島孔文 (2007). 家族構造の測定における構成因子に関する研究. *立正大学臨床心理学研究*, *6*, 19-32.
- 狐塚貴博 (2011). 青年期における家族構造と家族コミュニケーションに関する研究—青年の認知する家族内ストレスからの検討. *家族心理学研究*, *25*(1), 30-44.
- 久保田桂子 (2009). 青年期の母娘関係の発達差—会話分析による青年期前期と後期の交流の比較—. *心理学研究*, *79*(6), 530-535.
- 増田彰則・山中隆夫・武井美智子・平川忠敏・志村正子・古賀靖之・鄭忠和 (2004). 家族機能が学校適応と思春期の精神面に及ぼす影響について. *心身医学*, *44*(12), 903-909.
- Minuchin, S., Rosman, B., & Baker, L. (1978).

- Psychosomatic families*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (福田俊一(監修) (1987). 思春期やせ症の家族. 星和書店.)
- 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子 (2008). 家族心理学—家族システムの発達と臨床的援助—. 有斐閣
- 野口修司・狐塚貴博・宇佐美貴章・若島孔文 (2009). 家族構造測定尺度—ICHIGEKI—の作成と妥当性の検討. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **58**(1), 247-265.
- 小野寺敦子 (1993). 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究. 心理学研究, **64**(2), 147-152.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. 教育心理学研究, **44**, 11-22.
- Parsons, T. & Bales, F. R. (1956). *Family : Socialization and interaction process*, Routledge and Kegan Paul. (橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明(訳) (2001). 家族—核家族と子どもの社会化—. 黎明書房.)
- Rowa, K., Kering, P.K., & Geller, J. (2001). The family and anorexia nervosa: Examining parent-child boundary problems. *European Eating Disorders Review*, **9**, 97-114.
- 佐藤淑子 (2015). ワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ父母の育児行動と育児感情. 教育心理学研究, **63**(4), 345-358.
- 高崎絹 (2003). ライフサイクルと介護をめぐる家族関係: 高齢者虐待事例への家族介入と支援ネットワーク. 女性心身医学, **8**(3), 248-260.
- Usami, T., Kozuka, T., Hiraizumi, T., Morikawa, N., Furuyama, A., & Wakashima, K. (2011). Examining family transition with the current narratives. *International Journal of Brief Therapy and Family Science*, **1**(2), 111-116.
- 若島孔文・狐塚貴博・板倉憲政・宇佐美貴章 (2010). 「ICHIGEKI」を用いた同時的・累積的家族関係に関する研究. *Interactional Mind*, **3**, 92-98.
- 渡辺さちや (1996). 個人の発達・家族の発達 日本女子大学紀要, **43**, 13-19.